

緊急 レポート

8月27日に全国で公開された映画「愛についてのキンゼイ・レポート」(ビル・コンドン監督、リアム・ニソン主演)について、日本のマスコミは総じて好意的に評価しています。「一般には性教育のバイオニア」としてたたえられるアルフレッド・キンゼイですが、真の人物像はあまり知られてはいません。けれども、過去十数年間に出版された書物により、今、その全貌が明らかになりつつあります。

キンゼイは、まさしく世界の家庭崩壊、STD(性感染症)の蔓延、妊娠中絶、ポルノなど一連の性的混乱の源となった人物なのです。

アブステナンスの立場から、今回何らかのコメントが必要と考え、米国フォーカス・オンザ・ファミリー発行の「シテイズン」誌の記事を緊急レポートとしてご紹介します。

From the November 2004 issue of Focus on the Family Citizen magazine.
Copyright (C) 2004, Focus on the Family.
All rights reserved. International copyright secured. Used by permission.

キンゼイ・レポートの真実

科学者の名に値しない性科学者 アルフレッド・キンゼイ

文/ステイブン・アダムス
(米国フォーカス・オンザ・ファミリースタッフ)

「10人に1人は同性愛者だ」、または「わいせつなどというものはない、それは人間性の一部なのだから」という主張を耳にしたことがあるでしょう。けれども、それらの元をたどれば、アルフレッド・キンゼイ一人に行き着くことは、おそらく御存じなかったのではないのでしょうか。

キンゼイなりの科学的探究について映画が触れない事実がありますが、それは「娯楽」どころか、おぞましいものです。キンゼイの代表的著書「キンゼイ・レポート男性版」(1948年)

には、虐待を受けた1888人の少年と147人の少女の加害者たちによって集められたデータが盛り込まれています。キンゼイは調査のために虐待被害者を利用しただけではなく、はなはだしい偏見を含む調査法を用いました。それが、今も同性愛や姦淫行為を正当化するために用いられる極端な結論を導き出したのです。

このような事実をジュディス・ライスマン博士は、著書「キンゼイと性と欺瞞」(1990年発行)、及び「キンゼイ:その犯罪性」(1998年発行)

(共に邦訳なし)の中で明らかにしましたが、ほとんどのメディアは見向きもしませんでした。ライスマン博士は、今回の映画化の企画を耳にして、主役に内定していた俳優リアム・ニソンに公開状を送り、この映画に出演しないように訴え、「もし出演したら真正正銘の悪党を単に『少々問題あり』とだけ言うように描く『おぞましいほど事実とかけ離れた役柄』を演じるようになります」と警告したのです。

残念ながら、今も彼からの返答は

ありません。

一方、ライスマン博士は「反キンゼイ・レポート連合企画」に参加しています。これには、米国フォーカス・オンザ・ファミリーなど、いくつかのキリスト教団体も加わっています。目的は、映画評論家たちと観客にキンゼイの真の姿を知らせることです。

科学の美名に隠された嘘

キンゼイが「革新的」調査を始めた1940年代には、ほとんどの人は、性をプライベートな神聖なもので、人前で軽々しく話題にすべきものとは考えていませんでした。しかし、キンゼイはそのためらいを遠回しな誘導法で取り払いました。例えば、調査員は回答者たちに子ども時代に性の遊びをしたかどうかではなく、**何歳の時から始めたか**と聞いたのです。

もうひとつのキンゼイへの批判は、「偏りのある回答者たち」を使ったことです。つまり、アンケートに答えたのは、「性的に普通ではない人々」が多かったのです。後に行なわれた性の調査でも、アンケートに答えたボランティアたちの性行動は、それ以外の人々より2〜4倍多かったのです。例えば、10人に1人は同性愛者だという主張ですが、これは、ゲイの活動家たちが社会により受け入れられようと、結

キンゼイのもう一つの「発見」は、ほとんどの既婚者は不倫をしており、それも普通は夫婦関係に無害どころか、有益なケースもあるというものです。しかし、最近の調査では、既婚男性の75%以上、また既婚女性の90%以上は伴侶に忠実です。そうでなかった人々についても、ある調査では、不倫によって85%は傷つき、34%は離婚に至るそうです。もちろん、そのような事実はセンセーショナルリズムに走るニュース・メディアでは大々的に取り上げられることはありませんでした。

婚の権利などを含む人権問題を訴えるために長年使ってきた「統計値」です。しかし、正確に言えば、「10%」とは「キンゼイ・レポート」において、少なくとも3年間は同性愛行為をしていないという男性たちの割合です。実際には、生涯同性愛者だとキンゼイが言ったのは、4%近くでした。

しかも、この数字でさえかなり誇張されています。キンゼイの集めたボランティアはかなりの割合（ある説では25%）で囚人もしくは前科のある人で、多くの性犯罪者や異性装者や男妾を含んでいたと言います。多くの服役者が、3年またはそれ以上の収監期間に同性愛行為に走ることは、今や公然の事実です。

北米の多くの専門家は、同性愛者の正しい割合は、およそ1〜2%だろうと言います。

キンゼイのもう一つの「発見」は、ほとんどの既婚者は不倫をしており、それも普通は夫婦関係に無害どころか、有益なケースもあるというものです。しかし、最近の調査では、既婚男性の75%以上、また既婚女性の90%以上は伴侶に忠実です。そうでなかった人々についても、ある調査では、不倫によって85%は傷つき、34%は離婚に至るそうです。もちろん、そのような事実はセンセーショナルリズムに走るニュース・メディアでは大々的に取り上げられることはありませんでした。

また、キンゼイの私生活がどれほど乱れていたかはあまり知られていませんでした。彼は、両性愛者、サディスト、マゾヒストで、男性のスタッフと性的関係を持ち、自分の妻にもそれに加わるように誘ったのです。1997年に出たジェームズ・H・ジョーンズ著「アルフレッド・D・キンゼイ」が明るみに出した事実です。言い換えれば、客観的であるはずのこの科学者は、自分に都合の良い結論を出したかったのでしょう。

道徳秩序の破壊者

2400人の保守的な全米州議員たちで作るALECという団体が2004年4月に出した報告書によれば、「キンゼイ・レポート」は、全米におけるわいせつ文書取締法及び異常性行為禁止法の撤回の理由にさえ使われました。「キンゼイ・レポート」は、州議員たちが州法を制定また改訂するのに用いた刑法典にも影響を与えたそうです。

「1950年以前は、ほとんどのアメリカの法律は婚外の性行為を禁じていた」とALECレポートは言います。キンゼイ・レポートの「操作されたデータ」のお陰で、婦女子を性犯罪から守るべき少なくとも52の法律が、撤回されるか効力を弱められたと同レ

ポートは結論づけました。

文化と家族研究所の所長ロバート・H・ナイト氏は、1993年に「表34の子どもたち」と題するドキュメンタリーを制作しました。同氏は、キンゼイを激しく糾弾します。

「キンゼイは、道徳秩序を次々と破壊した人間です。過去数百年で、彼ほど基本的な社会構造にダメージを与えた人はいないでしょう。私は決して大げさに言っているわけではありません。なぜなら、彼はブレイボーイ哲学を生み出し、ヒュー・ヘフナーに影響を与えてボルノを世の中の主流に組み入れさせたからです。同性愛運動にとってキンゼイは今も指導者なのです。」

ヘフナーはキンゼイを、ほとんどひとりで「アメリカ人の性を見事に覚醒させた」功労者としてたたえました。ジュディス・ライスマンによれば、ヘフナーは大学生時代に「キンゼイ・レポート」についての論文を書き、ブレイボーイ誌を創刊し、ボルノが社会に浸透しやすい、過激でない手法をとって、性的覚醒をさらに押し進めることに打ち込みました。

ヘフナーは、「ブレイボーイ哲学」と名付けた連載コラムで、直接的に持論を展開し、その中で性の自由をたたえ、アメリカにおける「ビュリタンの」抑圧を罵倒しました。

一方、アブステナンス教育を進めるクリスチャンをはじめ保守派も、公立校

私はむしろ、本編の公開を歓迎しています。
なぜなら、キンゼイは40代以下の者にとって耳なれない名前ですし、
この映画は今まで公にされず社会に長いこと悪影響を与えていた勢力を、
明るみに出すことになるからです。ロバート・H・ナイト氏(文化と家族研究所所長)

で用いられる性教育カリキュラムに盛り込まれているフリー・セックス哲学はキンゼイとその追随者たちによって生み出されたものであると主張しました。多くの公立校の性教育は、コンドームの使用を強調しました。

その結果、危機感を持ったクリスチヤンの親たちによつて、結婚までアブステンランスを守ろうとする運動が生み出されることになりました。

性的倒錯者たちを 対象にした「調査」

キンゼイ研究所は、インディアナ大学ブルーミントン校キャンパスにあり、今もセクシュアリティ、生殖、ジェンダーについての研究活動を行っています。州政府と連邦政府の両方から資金援助を受け、国立ことも衛生発達研究所からは5年間に26万ドル以上の助成金を受けました。

同研究所は、子どもへの犯罪記録の提出は拒んでいます。それを否認する文書は公にしています。つまり「キンゼイ氏は性的倒錯者ではなかった、また、キンゼイ研究所は子どもを実験台にしたり、そのために人を雇い訓練したこともない」と言っています。

しかし同研究所は、レックス・キング氏などの性的倒錯者たちから情報提供を受けたことは認めています。

キング氏は、自分の家族内の男女、動物、また約800人の青少年少女と性行為をしたと言われる人物です。彼はまめに記録をとる人間でした。

キング氏の話は、1998年のイギリスのテレビドキュメンタリー番組「秘史：キンゼイの性的倒錯者たち」に記録されましたが、これはアメリカでは放映されませんでした。

同番組は、またエスター・ホワイトさん(70歳、仮名)の話も取り上げました。彼女の祖父と父が、ホワイトさんに性的ないたずらをして、その犯罪記録をキンゼイに報告したと言っています。彼女によれば、キンゼイは彼らの虐待行為に対して報酬を支払ったそうです。

ホワイトさんのような犠牲者たちが今も苦しんでいることを考えれば、キンゼイの映画について論争が起きていることは、それほど悪いことではないとロバート・H・ナイト氏(文化と家族研究所所長)は言い、以下のように述べています。

「私はむしろ、本編の公開を歓迎しています。なぜなら、キンゼイは40代以下の者にとって耳なれない名前です。この映画は今まで公にされず社会に長いこと悪影響を与えていた勢力を、明るみに出すことになるからです。」

また、ナイト氏によれば、単に映画に抗議するだけでは不十分です。

「身近な人々やメディアにアルフレッド・キンゼイの真の姿を伝える好機です。信頼に値する資料をなるべく多くの人の手に渡して、キンゼイの欺瞞性、犯罪性、また社会への悪影響がどれ程のものかを知らせてほしいのです。メディアはキンゼイの名前を利用してしようとするでしょうが、逆にキンゼイの影響力を弱めるチャンスになるかも知れません。」

私はこの映画の反響に注目しています。なぜなら、性革命の推進者たちは攻勢をかける時だと思うでしょうが、実際には、彼らのリーダーを集中攻撃の危険にさらしているのですから。」

ビデオ



『性, その嘘と真実』
日本語吹替版(32分) ディスカッションガイド付
定価3,675円



『真実の愛と性』
日本語吹替版(30分)
定価3,129円



Dr. ドブソンの
『ユース・セミナー』
第7巻「ポルノの害毒」
日本語吹替版(47分)
ディスカッションガイド付
定価3,800円